

令和8年産米実践管理

～「初期生育促進」→「適期中干し」→「穂肥施用で登熟向上」～

小苗・浅植えと浅水管理で初期生育促進！

巻農業普及指導センター

田植え時期から中干し前までの管理のポイント

- 稚苗は**苗丈 12cm・2.0葉の規格苗**に仕上げる。（老化苗にしない）
- 移植は、**1株4本、3cm植え**で初期の茎数増加を促進する。
品質低下や収量低下につながるため、田植機の設定を調整し、植込本数と深さを決める（大苗・深植えにしない）。
- 前年倒伏したほ場や、**籾数過剰ほ場**は、**基肥を適量に減らし**、品質低下を防ぐ。
- ワキ対策として、**田植え2～3週間後に落水してガス抜き**を行い、初期生育を促す。

1 育苗後半（硬化期）の管理

- 日中・夜間ともに被覆資材を**無被覆**とする。ただし、夜間の低温が予想される場合は被覆する。
- 田植え1週間前頃から、夜間もハウスを開放し**外気温に十分慣らして**硬化を徹底する。
ただし、夜間に8℃以下の低温が予想される場合は、早めにハウスを閉める。
- プール育苗は、低温や霜の注意報が出る時以外は**ハウスのサイドビニールを昼夜とも開放**する。
- **移植前追肥は、田植え4～5日前**に窒素成分で1箱当たり1～2gを施用する。

2 基肥

- 適正施肥量（表1）で適正籾数に仕上げる。
- 前年、早期に倒伏したほ場や、周囲よりも倒伏が甚大だったほ場は施肥量を1～2割減らす。

表1 窒素成分施肥量のめやす（kg/10a）

品種	分施	全量基肥
コシヒカリ	2～3	4～6
こしいぶき	4	6～7

**※過剰施肥は、籾数過剰や倒伏による
収量・品質低下につながるため注意！**

3 田植え

- コシヒカリの栽植密度は50株/坪、早生品種や晩植では60株/坪を目安とする。
- 活着・初期生育を良好にするため、荒天日を避ける。
- 深植えでは初期分げつ発生が抑制されるため、**植付け深さは2～3cm**とする（図1参照）。
- 過繁茂を避けるため、**植込本数は1株当たり4本程度**になるよう調節する（図1参照）。
- **活着するまでは水深を3～4cm程度**（低温や強風の場合は植え傷みを避けるため4～5cm程度の深水）とし、**活着後は2～3cmの浅水管理**で分げつの早期発生を促す。
- **田植え2～3週間後**にほ場を確認し、稲の黄化や**ワキの発生が見られたら水の更新**や、**2～3日落水してガス抜き**を行い、生育・発根を促進させる。

<参考>

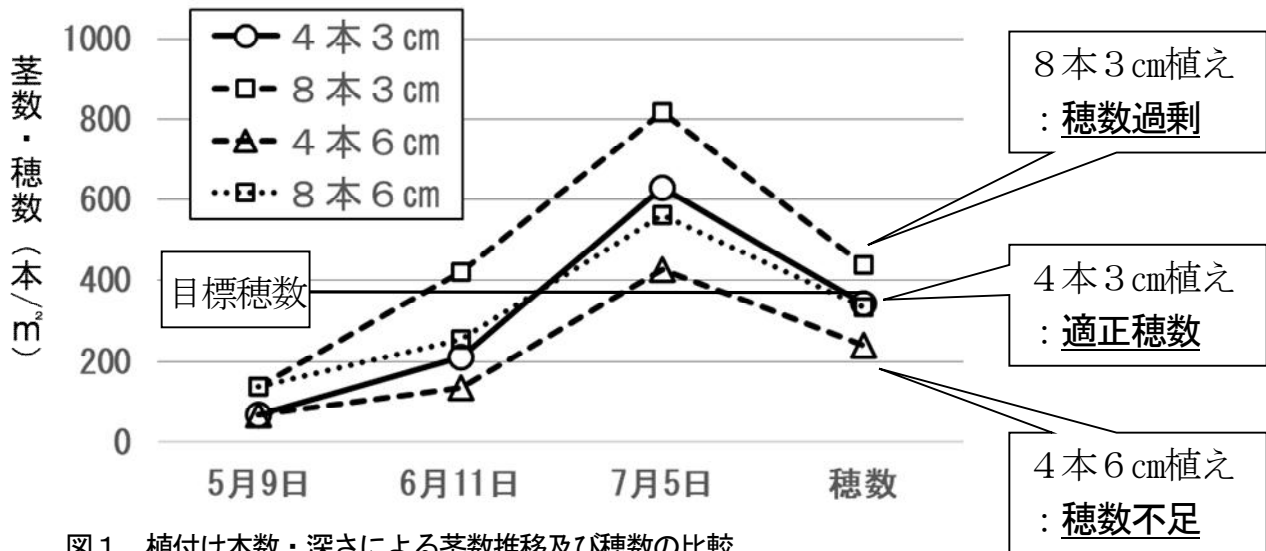


図1 植付け本数・深さによる茎数推移及び穂数の比較
(巻農業普及指導センター R6年 漆山)

- 深植えは初期分けつの発生が少なくなり、穂数及び収量の減少につながる。
- 植込本数を多くしても、籾数過剰になり、品質低下のリスクが高まる。また、登熟歩合が低下し収量は増えない。
- 大苗深植え（8本6cm植え）と小苗浅植え（4本3cm植え）は穂数がほぼ同じになるため、**小苗浅植えのほうが使用苗数が減り省力的で低コスト**になる。

➤ **植え初めに植付け深さと植込本数を確認し、田植え機の設定を調節しましょう！**

4 除草剤散布

- 代かき作業はていねいに行い、**漏水防止や田面の均平に努め**、除草効果を高める。
- 散布適期を逃さないように**農薬登録上の使用範囲内で早めの散布**を心がける。
- **一発処理剤1回の使用を基本**とし、雑草多発生ほ場や作業体系上やむを得ない場合のみ初期剤等との体系処理とする。**初期除草剤を使用する場合は田植え前処理を避け、田植え時または田植え直後に使用する。**
- 散布時期の**水深は、粒剤3～5cm程度、フロアブル剤5cm程度、ジャンボ剤5～6cm程度**を確保する。
- 除草剤散布後の**7日間は止水し、処理後4～5日間は湛水状態を保つ**。農薬流出防止のため落水・かけ流しを行わない。
- 近年、高温による除草剤の薬害が増えているので、使用基準に高温時での薬害が発生しやすい表示のある除草剤は高温時の使用を控える。

【 農薬使用に当たっては、登録内容を確認し、使用上の注意を遵守しましょう 】

5 補植苗の処理

- いもち病の伝染源になるので、**補植作業が終わり次第すみやかに除去**する。

「新潟市西蒲区・西区 水稻管理技術情報 (YouTube)」で、
令和7年度産米の振り返りと令和8年度産米管理ポイントについて情報配信！

動画はこちらから (YouTube の QR コード) →

